I　調査のあらまし

平城京の北方には、緑の美しい起伏豊かな奈良山丘陵がつらなっている。この丘陵地帯のほぼ中ほどを奈良県と京都府との境が東西に走っている。奈良山丘陵には、古代の瓦窯をはじめ多くの遺跡が存在することは従来から良く知られていた。[註1] 1964年、日本住宅公団は、両府県を含めたこの丘陵地帯の半分以上を占める約600 *ha*にわたって、団地造成をする計画を立てた。そこで、1964年12月から翌年3月にかけて、造成予定地内の遺跡分布調査をおこなった。分布調査の結果では、この平城ニュータウン予定地内に、奈良県側10ケ所、京都府側6ケ所の遺跡の存在が認められ、これら以外にも多くの遺物採集地点等があることが明らかとなった。[註2] これらの遺跡を、便宜上西北端から順次番号をつけ、また、その後の踏査で明らかになったものもさらに加えて、地点名として呼称している。

このうち、第8号地点は、1970年、奈良県教育委員会内に平城団地内第8号地点調査委員会を設け、同年7月から8月にかけて、発掘調査を実施し、瓦窯3基を確認した。[註3] ここでの遺構の保存状況はきわめて良好で、これについて、保存措置を日本住宅公団と協議中であったが、結論を得ぬまま団地造成が進行し、破壊されてしまったことは、はなはだ遺憾である。

1972年度は、奈良県、京都府の両府県にまたがった全域において、7月3日から1973年1月12日まで、予備調査の目的で実施した。

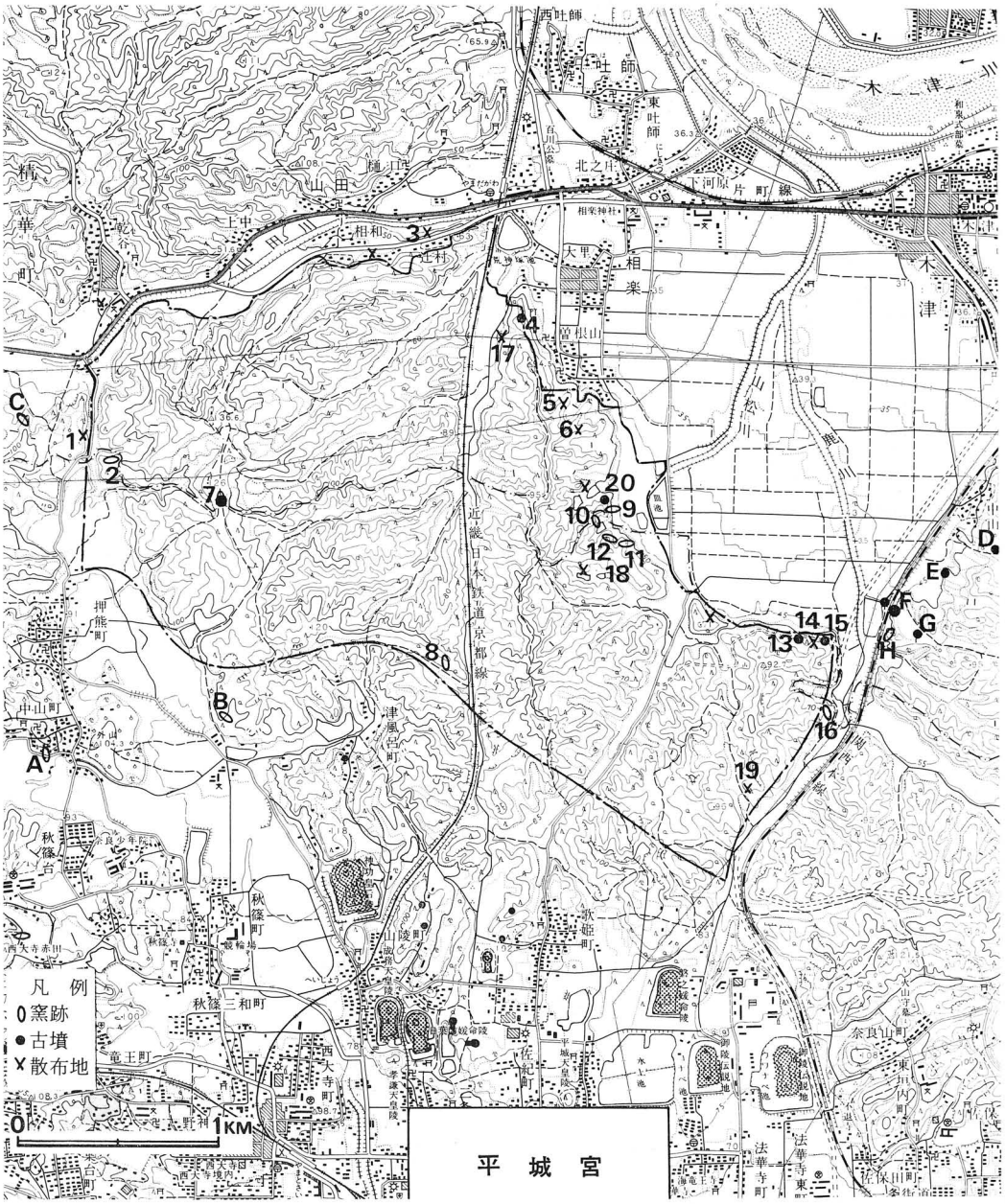
発掘調査は、12地点で実施し、このほか5ケ所の遺物採集地点の踏査をおこなった結果、4ケ所は事業地域外であり、1ケ所は現在ではその所在が不明であったので、今回の予備調査の対象地からはずした。また京都府側2ケ所は、土地交渉等の事情で本年度の調査を見送らざるを得なかった。

以上のニュータウン事業地内所在遺跡とその調査状況は第1表の如くである。

註1　梅原　末治　「相楽村の方形墳」（京都府史蹟勝地調査会報告第6冊）1925.3
奈良市史編集審議会編　「石のカラト古墳」（奈良市史 考古編）1968.3
梅原末治・赤松俊秀「山田荘村乾谷の瓦窯阯」（京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第14冊）1933
藤沢　一夫　「屋瓦の変遷」（世界考古学大系4）1961.7
藤沢　一夫　「造瓦技術の進展」（日本の考古学VI 歴史時代上）1961.7
奈良国立文化財研究所編　「平城宮発掘調査報告II」（学報第15冊）1962.5

註2　「文化財分布調査（平城地区）及び開発と保存の一般的ルールについて」　日本住宅公団大阪支所　1970.4.1

註3　八賀　晋・西村　康　「奈良山第53号窯の調査概要」　平城団地第8号遺跡調査委員会　1971.6



第1図　平城ニュータウン予定地内および付近遺跡分布図

A　中山瓦窯　　B　奈良山51・52号窯　　C　乾谷瓦窯
D　西山塚古墳（円墳）　　E　瓦谷古墳（円墳）　　F　市坂古墳（円墳）
G　上人ケ平古墳（前方後円墳）　　H　市坂瓦窯
平城ニュータウン予定地内（一点破線内）に所在する遺跡（アラビア数字）
については、右表を参照されたい。